海外インターンシップ型プログラム　体験記
シンガポール（南洋理工大学共同）

文化構想学部 2 年
中本 日向子（なかもと　ひなこ）さん

―このプログラムに参加したきっかけは何ですか？

2 年間父の仕事でイギリスにいたことがあったので、英語を勉強しに行くのではなく、英語で何かをしたいという観点で留学プログラムを探していました。語学学校へ通うことが目的の留学が多い中、このプログラムを見つけたので、参加しました。

―現地で違いを感じたり驚いたりしたことがあれば教えてください。

驚いたことは、現地の人々のホスピタリティーの精神がすごく強かったことです。プログラムの期間中のフリータイムには、シンガポールの学生たちが積極的に私たちを観光へ連れて行ってくれました。効率よく色んな場所に行けるよう考えてくれたり、おすすめの場所や食べ物を教えてくれたり、と本当に温かかったです。また、積極性も感じました。イギリスにいたときの友達も結構積極的ではありましたが、どちらかというと自分の意見を通そうとするというのが主流でした。しかしシンガポールの人たちはそうではなくて、私たちの意見を取り入れながらより良くしていこうとしてくれていたことが、いい意味ですごく衝撃的でした。

―プログラム参加中、ご自身で心がけたことはありますか。

初日の時点で、シンガポールの人たちがどんどん議論を進めていくので、このままだと自分の意見が何もないプレゼンテーションになってしまうなと懸念を感じ、臆せずに自分の意見を話していくことはすごく心がけていました。（シンガポールの学生達は）すごく優しいのですが「あなたはどう？」とは聞いてくれない傾向にあり、自分から「私はこう思うんだけどあなたはどう思う？」と切り出さないと取り込んでくれないのが大きなポイントでした。いい点でもありますが日本人としては苦しいポイントでもありました。自分がシンガポールの人たちの速い英語についていけず、それを察せられたからかもしれませんが。初日に気が付いて良かったと思います。

―留学を終えてから気づいたこと、自分が成長したと思ったことがあれば教えてください。

技術面と精神面で分けて言うと、技術面においては、プレゼンテーションの作り方が変わったことです。

今まではプレゼンテーションのスライド内に文字をたくさん書いてしまう癖があったのですが、シンガポールの人たちはアイコンやシンボルを意識的に使ってわかりやすくするという手法を使っていたので、自分もプレゼンテーションを作成するときにそういうものを取り入れ始めたことが 1 つ目の成長です。精神面では、ホスピタリティーの精神をすごく感じたので、今までホスピタリティー精神が皆無だったわけではありませんが、より外国人の人たちにあたたかく接しようという気持ちが生まれました。

―自分が変わったと思うところがあれば教えてください。

今回のインターンでは、私はダノンと伊藤忠についてのプレゼンテーションを作ったのですが、元々どちらも自分が入りたいと思っていたような業種ではありませんでした。でも、実際に行ってみることで、思っていたイメージと全然違うと感じ、興味を持ったので自分の視野が広がった気がします。「物をつくる」「売る」という単純なイメージしか持っていなかったので、物を作って売るために様々な角度からかが得ているのだな、という当たり前のことが改めて今回学べました。

―このプログラムをどんな人に勧めたいですか。また、検討中の人へメッセージをお願いします。

第一に、ある程度英語が話せるというバックグラウンドを持った人。最近日本の企業も色んな国に出しているので、帰国子女って結構増えていると思うんですね。ある程度英語力があるから、1 年間語学留学には行きづらいな、でも英語は使いたい、という人にとにかくお勧めしたいプログラムです。それから、私は 2 年生なのですが、恐らく 3 年生、4 年生に行くであろうインターンシップの第一ステップにもなると思いますし、学年がまだ低い時期に経験することで、今後の大学生活の授業の取り組み方にも影響してくると思うので、特に 3 年生以上とは書いてありますけど、それを気にせず 1 年生、2 年生にもお勧めしたいです。

―ありがとうございました！